

・プーフアナの一節、ストウーラ (Shura) のサットラ祭 (Galand: Das JB. in Auswahl, Nr. 156) を例証として挙げている。ここで究極の成功に導くのは、祭祀の正統の完了ではなく、却って祭祀の恐るべき破壊力である。

祭祀についてのかかる経験は、他の宗教においても見られる現象である。インドの大敘事詩マハーバータの結末は、祭祀の両面、平穩と恐怖とを、非常に顯著に示している。人間により考察され実行される秩序の中には、超絶の予知すべからざる作用に対処する余地はない。神々も天界も輪廻に束縛されて自由ではない。しかし時代と共にヴェーダ祭式にも変化が起り、古典期においては技術化された。古典期の祭祀の組織は、所詮それが超絶の不安定性を克服するに足りないことを認めさせている。

祭祀が超絶に達するために十分でない以上、人はいかにすればよいのか。ここで著者は朝夕行われる最も単純な祭祀アグニホートラ (Agnihotra) の考察に移る。その絶大な効験の宣揚にもかかわらず、また超絶との接触から起る危険な結果を除去するための努力にもかかわらず、結局超絶を克服して確実にこれに到達することは不可能である。

著者はさらに進んで、古典期ヴェーダ祭式の終極ともいいうべきプラナー・アグニホートラ (Prāgnihotra) を解明する。実際において、これは祭火と見なされる生氣の中に供物

として食物を捧げるに過ぎない。しかし祭祀はヒンドゥー教の中核でないことが知られ、重要性において祭祀に勝る「知識」も、究極の中核的要素となすに足りない。以上のごとく次々に超絶への接近を試みても、結局人は矛盾を完全に克服しえず、目的に到達することはできない。行文の屈折起伏の中に論じ来たり論じ去つてこの難問に対決した著者は、次の語をもつてこの示唆に富む考察を結んでゐる。"Der Ausgang bleibt unsicher, denn letzten Endes ist die Transzendenz ein Absprung ins Unbekannte" (p. 44).

(Transzendenzfahrtung, Vollzugshorizont des Heils. Das Problem in indischer und christlicher Tradition. Arbeitsdokumentation eines Symposiums, herausgegeben von Gerhard Oberhammer. Publications of the De Nobili Research Library, vol. V, 253 pp., Wien 1978.)

クラウス・シュリウス著

### サンスクリット文学抜粋集

辻 直四郎

著者自身も述べている通り、本書に最も近い抜粋集として

は、何人も有名なベートリンクのクレストマティエ(3. *And. herausg. von R. Garbe, Leipzig 1909*)に想到するに過ぎない。範をこれに取りつつも本書は、内容の豊富なこと、選択に周到な注意の払われていること、従来この種の抜粋集に求められない原文を含んでいること等により、大いに利用価値を高めている。

著者に従えば、サンスクリットの抜粋集を編集する場合には、次の三点を考慮しなければならない。すなわち難易に関する全ての段階(*Schwierigkeitsgrade*)、文学のあらゆる階層にゆきわたり、できるだけ多くのジャンル (*Literatur-schichten*)を含むことである(*Vorwort p. 3*)。実際本書はこれらの条件を満たしている。

ローマ字転写により二八七ページを埋め尽す内容を詳細に列挙することはできないから、ここには目次に従ってその大綱を示すに止める。

一、ヴェーダ文学(p. 9~66)においては、リグ・ヴェーダを始めとするサンヒター、ブラーフマナ散文、アーラニアカ、ウパニシャッド(*Bṛhadaranyaka III. 8, Chandogya VI-VII*)の順を追って、カルマ・スートラのためには、アーシュヴァラーヤナ・シュウウタ・スートラおよびシャーンカーヤナ・グリヒヤ・スートラから例を取っている。

二、敘事詩文学(p. 69~137)は、大敘事詩マハーバーラタ

(サーヴィトリ物語、バガヴァッド・ギーターの一部を含む)、ラーマヤナならびにプラーナによって代表されている。

三、次いで古典文学に移り(p. 139~226)、そのすべての分野から長短さまざまな例文が選ばれている。抒情詩あり、敘事詩あり、伝奇小説あり、戯曲あり、物語あり、絢爛多彩のサンスクリット文学の縮図が展開される。なお仏教文献から、ディヴィア・アヴァダーナの一節が採用されている。

四、最後に學術文献が収められ(p. 227~287)比較的に少い紙幅の中に、法制(マヌ、ヤージュニヤヴァルキヤ)、政治(カウティリア)、哲学(*Sarvadarśanasamgraha: cārya-kādarśanam*)、歴史(ラージャ・タランギー)、詩論(カーヴィアーダルシャ)および性論(カーマ・スートラ)が例示されて、自然科学以外の学芸の片鱗を窺わしめている。

抜粋された各篇の冒頭に、著者は簡明な解説を添えて、読者の便宜を計っている。本書は語彙を含まないが、著者自身のおいてその役割を果している。ただし著者の見解によれば、本書を利用する学習者は、教師の指導を受けることが好ましいという。もし文献を修了した学習者が、適当な指導者を得て、難易の順を追いつつ本書を読了するならば、学者としての素地を充分に備えることとなり、サンスクリット文学

のいずれの方面を専門として進むとしても、必ず報いられるところのあるのを疑わない。学界は著者シュリウス教授の努力に対し、深甚の感謝を呈するに吝でないと信じる。

(Klaus Mylius : Chrestomathie der Sanskritliteratur.  
287 pp., VEB Verlag Enzyklopädie, Leipzig 1978.)